

序

四日市 康 博

表題にあるように、本特集は「一四世紀の危機」をテーマとしたものである。現在、当テーマに関しては、諫早庸一（北海道大学）を代表とするプロジェクト「一四世紀の危機」についての文理協働研究「科学研究費補助金（基盤研究（B））において共同研究が進められている。本特集はその成果に基づくものであり、専門を異とするメンバーやオブザーバー間での対話基盤を整え、さらなる「協働」を進めることを目的とし、現時点での先端研究や通説となっているグラントセオリーに対する共通認識を深め、相互検証をおこなうための研究紹介をおこなう。「一四世紀の危機」とは、ここでは簡略に述べるにとどめるが（詳細は諫早による総括を参照）、一四世紀に端を発するヨーロッパ全体における社会的危機の持続状況を指し、気候の変動・

疫病の流行・それらに起因する社会的動乱の複合的な背景に拠るとされている。当然ながら、これらの背景となった要因やそこから波及した影響はヨーロッパ世界単独の問題であったとは限らず、アジアやアフリカの歴史状況とも不可分であったとの見方をする研究者も少なくない。そのため、この問題はしばしば、いわゆる「グローバルヒストリー」の視点から論じられてきた。しかしながら、本特集で諫早も指摘するように、その視点は多分にヨーロッパ史的な立脚点からのものが多かったことは否めない。そして、この問題はヨーロッパ史とアジア史の間だけの問題ではない。諫早は、一四世紀にユーラシア世界で圧倒的な存在感を有したモンゴル帝国の動揺と分裂に着目し、ユーラシア的な視点、言葉を変えれば、定住世界と遊牧世界の共生と相

克という観点から改めて「一四世紀の危機」を検証しよう
と試みる。

「一四世紀の危機」論において、東西の視点の違いとい
う問題のほかに、もうひとつ重要な要素として、歴史学と
気候・環境を扱う生態環境学との認識の違いという問題が
あげられる。グローバルヒストリーが盛んになってから、
環境史・生態史・環境考古学などの成果は、比較的早い段
階から取り込む努力がなされてきた。しかし、歴史学側の
認識が不十分であったり、気候学側の関心が合わないなど、
必ずしも十分に有効な協働がなされてきたわけではないな
かっ
た。そのため、諫早はよりメタな部分での共通認識と相互
理解、有効的な文理協働を目標として、その実践を目指す。
その意味で、本特集は文理協働の具体的な成果のひとつと
なる。

本特集は、書評集の形を取っており、総括をおこなった
諫早以外は対象となる書籍を挙げているが、厳密に言えば
全てが厳密な意味での書評であるわけではない。既に述べ
たように、本特集のテーマは「一四世紀の危機」およびそ
れに関わる要因、気候変動、疫病流行、社会危機に対する
歴史学的な分析であり、今回は特に気候史に焦点が当てら
れている。そのため、気候以外の歴史事象を扱う書に対す
る書評はその書の気候変動や社会危機に関わる部分に対す

る書評に限られることを断っておきたい。また、気候史研
究そのものを扱った場合でも、その観点には社会危機とユ
ーラシア史という意識が多分に含まれている。本特集の構
成およびその筆者は以下のとおりである。

一四世紀の危機——研究の現在

序 四日市康博

書評一 中塚武「樹木年輪古気候学の現状と課題——バ

レリー・トロエ『年輪で読む世界史』

書評二 宇野伸浩「モンゴル帝国初期の気候変動——白

石典之『モンゴル帝国の誕生』

書評三 西村陽子「中国史に関連する古気候研究の現

状と課題」——葛全勝等『中国歴朝気候変化』

書評四 長瀬篤音「中東史への気候史の導入とその反応

——リチャード・W・ブレット『初期イスラーム期

イランにおける綿花・気候・ラクダ』

総括 諫早庸一「ユーラシアから考えるへ一四世紀の

危機」

書評一を担当する中塚武(名古屋大学)は古気候学の専
門家であり、古気候に関する様々なデータの収集・整理・

分析をおこなう。そのデータには地学・生物学的なデータ、化学的なデータ、そして歴史的なデータも含まれる。歴史学において、史料の校訂やテキストクリティックが重要であるように、古気候学におけるデータも様々な計算や解析を伴うデータのパラメータの平準化などの整理作業やクリティックが必要となる。そして、歴史学において、モデル化による理論構築と実際の史料解説を様々な論証で埋めてゆく作業が必要であるように、古気候学のデータも様々なモデルに基づく計算と実際のデータ解析の間を埋めてゆく作業が必要となるが、この点、一般的な歴史学者の手に負えるものではない。その意味で、中塚は本プロジェクトの中核を担う一人であると言える。学術的な分野の内外にはそれぞれ言葉では直接表されない「暗黙知」が存在し、それを読み取るための知識とスキルが必要となる。中塚が取り上げるのは年輪学者であるバレー・トロエが専門外の一般読者に様々な研究トピックと最新の研究状況を紹介した書であるが、そこにはこの分野の専門家にしか読み取れない暗黙知が含まれている。本評において中塚は気候学の暗黙知の読み解き方を丁寧に示してくれている。

書評二の宇野伸浩（広島修道大学）はモンゴル帝国史の専門家であり、特に近年は環境史や社会人類学、史料学を駆使してモンゴル帝国と遊牧社会の解明に取り組んでい

る。宇野が取り上げるのは、モンゴル考古学の第一人者である白石典之の論である。考古学者としてモンゴルの環境や社会を知り尽くしている白石であるが、加えて古気候学の研究を積極的に活用することにより、モンゴル帝国の勃興を生態環境的なコンテクストからも説明しようとして試みている。しかし、宇野は白石の研究の有効性は認めつつも、古気候学のデータの利用には十分過ぎるほどのクリティックが必要であると警鐘を鳴らす。宇野が問題としているのはデータ自体の精度や有用性であるが、たとえデータ自体の信頼性が高かったとしても歴史事象との関連性を判断する際にはやはり慎重な扱いが必要となる。特に社会や国家には盛衰・興亡が付きものであるが、ある社会や国家が衰えたり亡びたりするとき、同時に別の社会や国家が興り、盛んになる。同様の環境下において、一方は衰退するのに、もう一方は興隆するのである。気温の高低や疫病の流行を単純に国家の衰退に結び付けられないことは言うまでもない。この問題はそのまま、我々のプロジェクト自体への警鐘であるとも言えよう。

書評三の西村陽子（東洋大学）は隋唐五代を中心とする中国および東部ユーラシア史の専門家であり、文献に加えて人文情報学的なデータ解析や考古学・地理学的な分析も駆使した研究をおこなっている。西村の取り上げる葛全勝

『中国歴朝気候変化』は中国における古気候学の立場からの気候変動とそれによる社会への影響を通史的に論じた書であり、近年の知見が取り入れられていることから、西村によれば「中国における最新の古気候学の現状を把握する上で現在最もよくまとまった書」である。ただし、やはりここでも、古気候学と歴史学の認識のズレが指摘される。西村によれば、その執筆陣に人文科学系の専門家は参加しておらず、史資料の扱いに厳密さが見られないことから気候変動と各王朝の歴史的展開の相关性に関する考証には問題が見えるという。もちろん、この問題は逆も然りであり、歴史学から古気候学へのアプローチにおいても注意されなければならない。本書は通史的に気候変動を扱うといっても、各章では各王朝ごとの断代史的な考察がなされている。気候変動や自然災害は王朝や社会の交替や変容に必ずしも対応して起こっているわけではないが、一方で、社会や国家が気候変動をはじめとする環境変化に対応する形で変容を続けてゆくという見方もされている。通史と断代史のどちらが正しいと言えるわけではないのだが、古気候学との相关性を考える上では、両者の視点をどのようなバランスで取り入れて考察すべきなのか、重要な課題になるのではないだろうか。

書評四の長瀬篤音(北海道大学)はイスラーム化以後の

イラン・中央アジア史、特にティムール朝史を専門として博士後期課程に在学しており、研究協力者として共同研究に参加している。長瀬が取り上げるのは、前近代のイラン・イスラーム社会史を専門とするリチャード・W・ブレットが彼の講義をもとに刊行した『初期イスラーム期イランにおける綿花・気候・ラクダ』である。イランは、イスラーム世界の一環であると同時にユーラシアのステップ地帯とも重なっており、歴史を通じて常にユーラシアの遊牧世界と接触し、時にその侵入を受け、遊牧世界と定住世界が融合した形で度々政権が樹立された。その意味では、ユーラシア東部の中国と類似した構造を持つていたと言えないこともない。長瀬が紹介するように、イスラーム史では古気候に関わる史資料の少なさから生態環境史を取り入れた歴史研究の素地が殆ど無かった点で、本書には大きな意義がある。そのうえで、長瀬が問題提起とするのは、イラン史の一部であるオグズ史(テュルク民族史)の立場からなされたブレットの気候認識への反発に見られる認識の相違である。この点、イラン・イスラーム史内での議論として紹介されているが、ユーラシア東部におけるテュルク系民族の移動に関しても同様の問題を想定することができる。今後、この問題をどのように扱うのか、まさに本プロジェクトの領分として検討されるべきであろう。

最後に、総括としてプロジェクトリーダーの諫早庸一がユーラシアにおける「一四世紀の危機」に関わるグラントセオリーを概観する。ここで取り上げられるのは、ブルース・キャンベル『大遷移』、ケネス・ポメラントツ『大分岐』、そして、ジャネット・アブー・ルゴド『ヨーロッパ覇権以前』（前近代世界システム論）とヴィクター・リーバーマン『奇妙な並行』であり、ヨーロッパ史から生じた「一四世紀の危機」論のユーラシア史における再構築を試みると同時に、従来のグラントセオリーにおける無意識的なユーロセントリズムの存在を指摘する。そして、ユーラシアの「一四世紀の危機」を考える上で中核となる中央ユーラシア環境史研究の現状について、ニコラ・ディ・コスモの研究を取り上げて紹介する。さらに、本特集ではメインテーマとはされていないが、もうひとつの柱となる「疫病による社会危機」の問題をモニカ・グリーンによる最新の研究を基に概観する。これらの先学を俯瞰した上で、諫早が唱えるのは、「一四世紀の危機」は単に一四世紀だけの問題にとどまらないことである。すなわち、一四世紀の危機に至る前段階の一三世紀を視野に入れた上で、長期持続的な観点から「一四世紀の危機」を捉え、さらには中塚の示唆する変動の「周期性」に注目すべきであるという。また、空間的には、空白地帯である中央アジア・西アジアのデー

タや各地域間の相関性により注目すべきであるともいう。

以上のように、本特集は、「一四世紀の危機」という問題をユーラシア史的観点から捉えるにあたって、まずは、ユーラシアの各地域において、そして、古気候学と歴史学の双方において、どのような研究状況であるのか、相互理解と共通認識を深めるための研究動向紹介である。プロジェクトには、このほかにヨーロッパ中世史を専門とする大貫俊夫（東京都立大学）が加わる。

最後に本プロジェクトが克服すべき点を2、3点あげておきたい。ひとつは、古気候学から見たユーラシア史を俯瞰した際の、東南アジア史・南アジア史の研究蓄積の希薄さである。中央アジア・西アジアにおける古気候データと研究の空白は既に長瀬・諫早が指摘しているとおりであるが、東南アジア・南アジアにおいてはそれ以上にユーラシア史研究とのリンクが薄いと言える。もうひとつは、「長い一四世紀」としての一三世紀を考える際に、やはり一五・一六世紀も視野に入れる必要があるという点である。特に、グローバルヒストリーの観点からモンゴル帝国の分裂と衰退が論じられる際に、中国の状況ばかりが注目され、元朝が大都を放棄してモンゴル高原へ北帰した以後のいわゆる「北元」の状況に焦点が当てられることが少ないように思われる。果たして、中国に拠点を置いていた時

序（四日市）

代と北帰したモンゴルとでは社会的危機の認識内容に差異があつたのであろうか。本特集でもしばしば遊牧社会と定住社会の相克が問題点として取り上げられているように、北元以後の気候変動と社会の相関係は、それ以前の時代を見る際にも重要な手がかりになると思われる。

（本学文学部准教授）